

包丁の跡

結城 文

流しのわきの白い天板の上に

三筋 四筋黄ばんでついている

包丁の跡

新築間もない頃

母さんが林檎かなにかを切ろうとして
つけた傷

すぐ目の前にまな板があるのに！
なぜ？

直接口に出さなかつたけれど

——私は内心腹をたてた
傷が目立ってくる

漂白剤をしみこませては拭いたものだ

いまその傷に目がいつて

「まあ いいか」と呟く

睫毛に狭霧のようなものが降る

もう帰らないあのことこのことが

どつと私を浸したかと思うと

互いに目配せしあつてたちまち消えた

母さんがそれまでやっていた婦人会の仕事などから

退いて 同居をはじめたのだった

それまで親としてものを言っていた母さんが

自分自身しだいに頼りなくなつて

人間としてのかなしみを一番感じていた時なのに

私はその心に添って生きてはいなかった

せかせかと乾いていた

——その心にもつと向き合えばよかつた

喉元にわく林檎の酸のようなものを

こくんと飲み下す

「まあ いいか——真っ白にしなくても」

母さんのつけた

包丁の黄ばんだ傷跡を

私はふきんでそつと拭く